

教えてもらった話

～私たちが大切なことだと感じたこと～

VOL 9

ご自由にお持ち帰りください。



安心・快適そしてワクワク

株式会社 くるま生活

丸坊主

中学生の弟が学校帰りに床屋で丸坊主にしてきた。失恋でもしたのかと聞いたら、小学校からの女の子の友達が今日から登校するようになったからだ、と。彼女は今まで病気で入院しており薬の副作用で髪の毛が全部抜けてしまったらしい。

「女が丸坊主じゃ恥ずかしいって言ってたし、だったら他にも丸坊主がいりゃいいかなと思って、野球部の奴等は元々丸坊主だけど野球部じゃない丸坊主がいた方がいい」と弟は言っていた。

翌日、丸坊主で登校した弟は、帰宅するなり「同じ事考えた奴が一杯いた……」と。

なんでも優等生から茶髪問題児を含めクラスの男子全員が丸坊主かそれに近い頭になっており、病気の子と仲が良い女の子達までベリーショート、一人は完全な丸坊主になってたらしい。

更に担任の先生(男性)まで丸坊主。丸坊主だらけの教室で、病気の子は爆笑しながら「ありがとうありがとう」と泣いたという。

★運命好転十二ヶ条 ★

1. さわやかであること

お金や勝ち負けにこだわらずに美しく生きる人を神様は応援する。

2. 幸せを口にする事

「私ほど幸せな人はいない」と言い続ける人は幸せになる。

3. 素直であること

「だって」や「でも」と切り返さず黙って受け入れる生き方。

4. 誠実であること

示された善意や好意を受け入れ それに応える人間関係。

5. 掃除をすること

神様はきれい好き居場所がないとすぐに出て行ってしまふ。

6. 笑うこと

魂が穢れ、迷い、問題を抱えているときこそ、笑ってしまおう。

7. 感謝すること

「ありがとう」の言葉が全てを味方にし、人生を楽にする。

8. 人に喜ばれること

人間には「喜ばれると嬉しい」という特別な本能がある。

9. 言葉を愛すること

「ありがとう」といえば「ありがとう」と言いたくなる現象が降ってくる。

10. おまかせすること

自分の思いを持たない。自分で自分の人生を勝手に決めこまない。

11. 投げかけること

投げかけたものが返ってくる。投げかけないものは返ってこない。

12. 食生活

お金があるかないかで生活スタイルを変えずに普通のを普通に食べる。

****小林正観****

<心に響いた「たった一言」> 「ごめん」

ぼくは、小学六年の時長い間ケンカをしていました。友達が「うざい」と言ってからのケンカでした。ぼくは、おれも「う

ざいと思ってるから」といいその後は口も聞いていなかった。

しかし、部活では必ず彼に会うたびにうざい中に謝ろうかな？という心が少しあります。でも彼の方からケンカを持ち出したのだから意固地状態でした。

そして、ぼくは家に帰ってからずっとなやんでいました。母にそうだとすると「悩むくらいなら謝れば。そしたら必ず許してくれる」と優しくいわれました。

次の日にクラスに入り彼に「おはよう」と元気よくいったら彼も「おはよう」といって話しました。そしてぼくは「ごめん」といって仲直りをしました。

心がスッキリしました。

その後彼とは、別の中学校ですが彼とのケンカをふくんだ数々の思いでは忘れません。

愛知県小牧市立小牧中学校 舟橋さん

★ハーモニカ★

10歳の頃、僕にとって忘れられない出来事があります。ある日、友達の家に行ったらハーモニカがあって、吹いてみたら

すごく上手に演奏できたんです。無理だと知りつつも、家に帰ってハーモニカを買ってくれと、親父にせがんでみた。

すると親父は「いい音ならこれで出せ」と神棚の榊(さかき)の葉を1枚取って、それで「ふるさと」を吹いたんです。あまりの音色のよさに、僕は思わず聞き惚れてしまった。

もちろん、親父は吹き方など教えてはくれません。「俺にできておまえにできないわけがない」そう言われて学校の行き帰り葉っぱをむしっては、一人で草笛を練習しました。だけど、どんなに頑張ってみても、一向に音は出ない。諦めて数日でやめてしまいました。

これを知った親父がある日「おまえ悔しくないのか。俺は吹けるがおまえは吹けない。おまえは俺に負けたんだぞ」と僕を一喝しました。続けて「一念発起は誰でもする。実行、努力までならみんなする。そこでやめたらドングリの背比べで終わりなんだ。一步抜きん出るには努力の上に、辛抱という棒を立てるんだよ。この棒に花が咲くんだ」と。その言葉に触発されて僕は来る日も来る日も練習を続けました。

そうやって何とかメロディーが奏でられるようになったんで

す。草笛が吹けるようになった日、さっそく親父の前で披露しました。得意満面の僕を見て親父は言いました。「偉そうな顔するなよ。何か一つのことのできるようになった時、自分一人の手柄と思うな。世間の皆様のお力添えと感謝しなさい。錐（きり）だってそうじゃないか。片手で錐は揉めぬ」努力することに加えて、人様への感謝の気持ちが生きていく上で、どれだけ大切かということ、この時、親父に気づかせてもらったんです。

翌朝、目を覚ましたら枕元に新聞紙に包んだ細長いものがある。開けて見たらハーモニカでした。喜び勇んで親父のところに駆けつけると「努力の上の辛抱を立てたんだろう。花が咲くのは当たり前だよ」子ども心にこんなに嬉しい言葉はありません。あまりに嬉しいものだから、お袋にも話したんです。するとお袋は、「ハーモニカは3日も前に買ってあったんだよ。お父ちゃんが言っていた。あの子はきっと草笛が吹けるようになるからってね」

僕の中から大粒の涙が流れ落ちました。いまでもこの時の心の震えるような感動は、色あせることなく、心に鮮明に焼きつ

いています。

出典元：(一流たちの金言 月刊「致知」編集長藤尾 秀昭)

★ありがとう、ありがとう★

一人のお母さんから、とても大切なことを教えられた経験があります。 そのお宅の最初に生まれた男の子は、高熱を出し、知的障害を起こしてしまいました。次に生まれた弟が二歳のときです。ようやく口がきけるようになったその弟がお兄ちゃんに向かって、こう言いました。

「お兄ちゃんなんてバカじゃないか」

お母さんは、はっとしました。それだけは言ってほしくなかった言葉だったからです。そのとき、お母さんは、いったんは弟を叱ろうと考えましたが、思いなおしました。 ——弟にお兄ちゃんをいたわる気持ちが芽生え、育ってくるまで、長い時間がかかるだろうけど、それまで待ってみよう。

その日から、お母さんは、弟が兄に向かって言った言葉を、自分が耳にした限り、毎日克明にノートにつけていきました。そして一年たち、二年たち・・・しかし、相変わらず弟は、「お

兄ちゃんのバカ」としか言いません。お母さんはなんべんも諦めかけ、叱って、無理やり弟の態度を改めさせようとしてきました。しかし、もう少し、もう少し・・・と、根気よくノートをつけ続けました。

弟が幼稚園に入った年の七夕の日、偶然、近所の子どもや親戚の人たちが家に集まりました。人があまりたくさん来たために興奮したのか、お兄ちゃんがみんなの頭をボカボカとぶちはじめました。

みんなは「やめなさい」と言いたかったのですが、そういう子であることを知っていましたから、言い出しかねていました。そのとき、弟が飛び出してきて、お兄ちゃんに向かって言いました。「お兄ちゃん、ぶつならぼくだけぶってちょうだい。ぼく、痛いって言わないよ」お母さんは長いこと、その言葉を待っていました。

その晩、お母さんはノートに書きました。「ありがとう、あ

りがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう・・・」 ほとんど無意識のうちに、ノートの終わりのページまで鉛筆でぎっしり、「ありがとう」を書き連ねました。人間が本当に感動したときの言葉は、こういうものです。

やがて弟は小学校に入学しました。入学式の日、教室で初めて席が決められました。ところが弟の隣に、小児マヒで左腕が不自由な子が座りました。お母さんの心は動揺しました。家ではお兄ちゃん、学校ではこの友だちでは、幼い子に精神的負担が大きすぎるのではないかと思ったからです。

その夜、ご主人と朝まで相談しました。家を引っ越そうか、弟を転校させようかとまで考えたそうです。結局、しばらく様子を見てから決めようということになりました。

学校で最初の体育の様子を見てから決めようということになりました。学校で最初の体育の時間のことです。受持ちの先生は、手の不自由な子が体操着に着替えるのを放っておきました。手伝うのは簡単ですが、それより、一人でやらせたほうがその子のためになると考えたからです。

その子は生まれて初めて、やっと右手だけで体操着に着替え

ましたが、そのとき、体育の時間はすでに三十分も過ぎていました。二度目の体育の時間のときも、先生は放っておきました。すると、この前は三十分もかかったのに、この日はわずかな休み時間のあいだにちゃんと着替えて、校庭にみんなと一緒に並んでいたのです。

どうしたのかなと思い、次の体育の時間の前、先生は柱の陰からそっと、その子の様子をうかがいました。すると、どうでしょう。前の時間が終わるや、あの弟が、まず自分の服を大急ぎで着替えてから、手の不自由な隣の席の子の着替えを手伝いはじめたのです。手が動かない子に体操着の袖を通してやるのは、お母さんでもけっこうむずかしいものです。それを、小学校に入ったばかりの子が一生懸命手伝ってやって、二人ともちゃんと着替えてから、そろって校庭に駆け出していったのです。

そのとき、先生は、よほどこの弟をほめてやろうと思いましたが、ほめたら、「先生からほめられたからやるんだ」というようになり、かえって自発性をこわす結果になると考え、心を鬼にして黙っていました。それからもずっと、手の不自由な子

が体育の時間に遅れたことはありませんでした。

そして、偶然ながら、また七夕の日の出来事です。授業参観をかねた初めての父母会が開かれました。それより前、先生は子どもたちに、短冊に願いごとを書かせ、教室に持ち込んだ笹に下げさせておきました。それを、お母さんが集まったところで、先生は一枚一枚、読んでいきました。

「おもちゃがほしい」、「おこづかいをもっとほしい」、「じてんしゃをかってほしい」……。そんないかにも子どもらしい願いごとが続きます。それを先生はずっと読んでいくうちに、こんな言葉に出会いました。

「かみさま、ぼくのとなりの子のうでを、はやくなおしてあげてくださいね」　言うまでもなく、あの弟が書いたものでした。先生はその一途な願いごとを読むと、もう我慢ができなくなって、体育の時間のことを、お母さんたちに話して聞かせました。

小児マヒの子のお母さんは、我が子が教室でどんなに不自由しているだろうと思うと気がひけて、教室に入ることもできず、廊下からそっとなかの様子をうかがっていました。しかし、先

生のその話を聞いたとたん、廊下から教室に飛び込んできて、床に座り込み、この弟の首にしがみつき、涙を流し、頬ずりしながら絶叫しました。

「ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう……」 その声がいつまでも学校中に響きました。

出典元(「続 気くばりのすすめ」鈴木 健二 著 講談社文庫より)

★親切の輪★

北海道新聞の切り抜きにある中年男性の投書がありました。

終電車の発車間際に切符なしで飛び乗り、車掌さんが回ってきた時に、切符を買おうと財布を出そうとしたが、財布がなかった。小銭入れもない。どこかで落としたのだろうか。途方にくれたけれども、そのことを正直に車掌さんに言いました。

「すみません。明日、必ず営業所まで行きますから、今日は乗せてください」

ところが、この車掌さん、よほど虫の居所が悪かったのかどうか、許してくれない。次の駅で降りろ、と言うのです。次の駅

で降りても家に帰る手段はない。ホームで寝るにとしては北海道の夜は寒すぎる。どうしようもなく困っていたら、横に座っていた同じ年格好の中年の男性が回数券をくれたんです。

お礼をしたいからと言って、その男性に名前や住所をたずねたけど、ニコニコ手を振って教えてくれない。最後は借りたことを忘れて、なぜ教えてくれないのかと文句を言ったら、次のような話をしてくれました。

「実は私もあなたと同じ目にあって、そばにいた女子高校生にお金を出してもらったんです。その子の名前を何とか聞きだそうとしたけど教えてくれない。

「おじさん、それは私のお小遣いだから返してくれなくて結構です。それより、今おじさんがお礼だといって私に返したら私とおじさんだけの親切のやり取りになってしまいます。もし、私に返す気持があったら、同じように困った人を見かけたら、その人を助けてあげてください。そしたら私の一つの親切がずっと輪になって北海道中に広がります。そうするのが私は一番うれしいんです！！そうするようになって私、父や母にいつも言われてるんです」

と私に話してくれました。

出典元：(心ゆたかに生きる 西日本新聞)

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました。

ホンの少しですが、この冊子を手にとられたすべての人が心豊かになることを祈念しております。

株式会社くるま生活は幸福創造企業です。

私たちは人が幸福になるために必要な事は二つあると考えています。

①人に存在を認められる事

②素敵な想いが実現すること事

私たちとご縁がある方は勿論のこと、ご縁の無い方も幸福になるように
仕事させていただきます。(*^^)v

〒720-0961

広島県福山市明神町2丁目9-25

株式会社くるま生活

代表取締役社長 井上康一

TEL 084-943-7123

info@kurumaseikatsu.co.jp

第9回作成 2014年10月18日

コピー大歓迎。何部でもお届けします。